

《論文》

鳥獸戯画の猫と童子経曼荼羅

——平安後期の猫の描写について——

山 本 陽 子

〈要旨〉「鳥獸戯画」甲巻に登場する猫の顔が、なぜ身体に比べて手馴れた描き方であるかを考察する。この描き方は、甲巻に先行する「鳥獸戯画」乙巻のネコ科の動物表現とも、12世紀初めの『三十六人集』中の葦手絵の猫や12世紀後期の「信貴山縁起絵巻」の猫、春日大社蔵「金地螺鈿毛抜型太刀」の猫とも異なる。

しかし白描図像で原本が12世紀とされる『図像抄』の「童子経曼荼羅」や「十五鬼神図像」中の「猫の如し」と形容される猫鬼、さらに12世紀後半の「辟邪絵巻」の柅檀乾闥婆の戟に刺された猫鬼の顔には甲巻と共通する描き方が見られる。仏教絵画から「鳥獸戯画」への影響において、これまで指摘されることのなかった甲巻における例として挙げたい。

些細なことだが気になるのが「鳥獸戯画」の猫の顔である。「鳥獸戯画」甲巻には、烏帽子をかぶった虎縞の猫が登場する(図1)。田楽を見る動物たちの中から、顔に扇をかざしながら、倒れた蛙を囲む一群を振り返る、擬人化された立姿である。一度しか出てこない¹⁾脇役にもかかわらず、その顔の描き方が手馴れているのは何故なのか。

ほぼ正面を向いた顔の左右に突き出るヒゲ、アーモンド形の大きな目に縦長の瞳²⁾、上瞼の線を直角に曲げて鼻の両側に沿わせ、真ん中で合わせて鼻先を形作る描き方で、端的に丸顔の日本猫の特徴を捉えている。口も、一本のω状の線で左右の上唇のふくらみをあっさりとして表してしまう。まるで記号化されたマンガの主人公のように迷いのない描きぶりだ。ならば猫全体の描写が巧みかといえば、他の動物と共通する立った後足はともかく、扇を持つ前足や背中線の線は何とも頼りない。猫の顔部分に限っての巧みな描き方は、何に基づいたのか。



図1 「鳥獸戯画」甲巻の猫
高山寺所蔵

1) 「鳥獣戯画」のネコ科の表現

あらかじめ検討しておきたいのが、「鳥獣戯画」乙巻の他のネコ科の動物表現を参照した可能性である。乙巻は「鳥獣戯画」甲巻の猫の場面と同一作者とされるものの、甲巻に先行する作例であると考察され³⁾、擬人化されていない各種の動物が描かれる中に、3匹の豹・6匹の虎の親子・2頭の獅子が含まれているためである。このうち右端の虎は星曼荼羅で貪狼星の乗物として描かれる四神中の虎と近似し⁴⁾、右側の獅子については阿摩提観音の乗物の獅子と近似していることから⁵⁾、乙巻の一部の動物に、密教図像が参照されていた可能性が指摘されている。

しかし甲巻の猫と比較すると、豹も虎もいずれも鼻先が長く突き出し(図2)、仰向く小虎一匹を除いてすべて横向きに描かれる。鼻の立体感ほ頬のあたりにある両側の線ではなく、毛の流れ(もしくは縞)によって表されている。獅子の1頭は正面向きだが頭部は逆三角形で、2頭とも鼻筋は両側の線ではなく毛の流れによって表され、いずれも猫の顔の描き方とは異なっている。

ちなみに甲巻より後の時代に別の筆者によって描かれたとされる「鳥獣戯画」丙巻にも、猫は一度だけ登場する。山車に見立てた大八車を引く動物たちを木陰で見る一群の中に、現実の猫のように丸くうずくまった姿で描かれる(図3)。甲巻と同じく虎縞であり、正面向きの猫の顔のヒゲもアーモンド型の目も、2本線で浮かび上がらせた鼻筋も、ω状に引かれた口元の線も、甲巻の猫の顔と同じ描き方なので、甲巻に倣ったものと考えられる。芭蕉らしき葉を烏帽子に見立てて頭に載せていることも、甲巻の猫を意識したものであろう。



図2 「鳥獣戯画」
乙巻の虎(部分)
高山寺所蔵



図3 「鳥獣戯画」
丙巻の猫
高山寺所蔵

2) 平安後期の猫が描かれた作品

甲巻の猫の顔の描き方はどこから来たのか。「鳥獣戯画」以外で、甲巻の猫と同時代、あるいは先行する時代の猫の描写と比較してみたい。まず「日本最古の「絵に描かれた猫」⁶⁾としてよく知られているのが、12世紀後半の作とされる「信貴山縁起絵巻」の「尼君の巻」の猫である。幼い頃に分れた弟を探す尼君が訊ね歩く途上の家の奥に赤い首輪を付けた猫が、うずくまって描かれている(図4)。黒白のぶち猫で、目はアーモンド形で瞳は縦長で鼻先は黒いが、鼻筋を形づくる鼻の両側の線は見当たらない。顔には猫の特徴ともいふべき髭がなく、うずくまる体勢も「鳥獣戯画」丙巻の猫と比較しても、描き慣れていない感がある。



図4 「信貴山縁起絵巻」
「尼君の巻」の猫
信貴山朝護孫子寺所蔵

じつはこれに先行する猫の絵がある。西本願寺に伝わる『三十六人集』のうち「能宣集上」第4頁の下絵である。葦手絵風の瓶と並ぶように、童髪の子供が猫を抱こうとする姿が描かれている(図5)。この『三十六人集』は12世紀初めの和歌集で、天永3年(1112)の白河法皇の六十の賀に際して作られたものにあたるのではないかとされるので⁷⁾、「信貴山縁起絵巻」より約半世紀ほど早い。この絵の意味について白畑よしは猫を無理やりとらえようとしているとして、本文中にある「なまじひ」の意を絵にしたものと解す⁸⁾が、江上綏は横の「う」形の鳥のとまる瓶「へ」を「うへ」と解し、子供を当時10歳の鳥羽天皇と考える⁹⁾。



図5 『三十六人集』
「能宣集下」(部分)
西本願寺所蔵

どちらの意味であったにしても、子供が抱く動物を猫とする判断は一致している。ただしこの猫の顔の箇所を上から文字が書かれているので細部が見えにくい。判明するのは黒白のぶちがあること、猫の足の輪郭が毛描きになっていること、ヒゲが描かれていること程度で、左側に鼻筋が描かれているように見えるが眼はアーモンド形ではなく、それ以上の描写は判らない。いずれにしても、引目鉤鼻ですんなりと描かれた子供の顔に比して、猫の表現はたどたどしい。同時代か先行する世俗の絵画の中に表わされたこれらの不慣れた猫の描写が、「鳥獸戯画」甲巻の猫の描き方の起源であったとは、考え難い。

3) 「金地螺鈿毛抜型太刀」の螺鈿の猫

猫が登場する作品としてはもう一点、春日大社所蔵「金地螺鈿毛抜型太刀」があり、猪熊兼樹により大治6年(1131)前後の作とされる。その鞘さやに猫が6匹、螺鈿と蒔絵で表されている。鞘の表裏に3匹ずつ、歩行する猫・雀を捕らえる猫・走る猫、座る猫・雀を捕らえる猫・歩行する猫で、その形態は全て異なるが、いずれも体にぶちが表現され、首輪を結んでいる。

このうち鞘の表にある雀を捕らえる猫の顔が、正面から描かれたものである(図6)。捕らえた雀の羽を爪を立てた右前足と後足で押さえつけるところなど、「信貴山縁起絵巻」や『三十六人集』の猫に比べると、その生態を捉えてはるかに巧みに表現されていることがわかる。猫の眼の上の線が鼻筋の両側に延びて鼻先を形作るころは、「鳥獸戯画」甲巻の猫の描き方にかなり近い。ただし瞳の表現は甲巻のように縦長ではなく、丸いガラスらしきものが嵌められ、その外側に三日月型の螺鈿が貼られて虹彩を表わしている点では異なっている。白描画の「鳥獸戯画」とは異なる工芸の技法が絡んでくるので、猫の顔の描写を単純に比較することはできない。

猪熊は猫と雀の背後に竹が表されることに注目し、同様の竹に猫と雀の組合せの「猫画障子」が、承久年間(1219～1222)に清涼殿朝餉間に存在したことを挙げる。それが向かい側の大和絵と対照して唐絵で描かれたと想定し、五代・北宋で成立していた「竹に猫」「竹に雀」の図様が日本に持ち込まれ学習され



図6 金地螺鈿毛抜型太刀鞘
表側の猫 春日大社所蔵

たのが、「金地螺鈿毛抜型太刀」の意匠と考える¹⁰⁾。ここで猪熊が例に挙げた当時の様々な中国の猫の絵には、「鳥獸戯画」甲巻の猫の表現と近似するものはない。しかし何らかの形で中国から日本に入ってきた猫の絵を参照した可能性も、考えてみる必要がある。

4) 「童子経曼荼羅」の猫鬼

平安時代に中国から入った猫の表現として、もうひとつ考えられるのが仏教絵画である。動物が登場する仏画としてまず念頭に浮かぶのが、臨終の釈迦を前に人や天部の他に多くの動物が集まってその死を悲しんでいる涅槃図である。しかし中野玄三によれば、平安時代の涅槃図にはまだ獅子などわずかな動物しか見えず、宋画の影響を受けて多くの動物が描かれるようになり、猫が登場する例は鎌倉時代以降であるという¹¹⁾。「鳥獸戯画」甲巻の猫の描写に参照された可能性はない。

猫ではないが猫の姿をした疫神が記される經典に、『童子経』と通称される『佛説護諸童子陀羅尼經』が¹²⁾あり、懐妊を妨げ出生時に嬰兒の命を奪う要因として、十五の鬼神が挙げられている。これらの鬼神は小児を脅かす疫神でもあり、その形はそれぞれ、牛・師子・鳩魔羅天・野狐・彌猴・羅刹女・馬・婦女・狗・猪・猫兒・鳥・獺狐・蛇の如しという。十五鬼神を封じるためには、陀羅尼を誦しながら五色の糸に結び目を作り、鬼神たちの名を書いて呪縛するのだといい、猫の姿をした鬼は曼多難提の名で呼ばれている。

『童子経』の起源についての考察や、平安末期から鎌倉時代におけるその修法、用いられた童子経曼荼羅の本尊の変化は、小林太市郎の論考「童子経法及び童子経曼荼羅」¹³⁾に詳しい。小林は、この十五鬼神の呼称のいくつかが全く別の『仏説金輪仏頂大威徳熾盛光如来陀羅尼經』中の諸鬼と共通することから、架空の名ではなく「或地方に於て実際に恐れられてゐた悪鬼」とし、その逐疫手段には中国古来の追儼が影響していると考察する。

小林によれば『佛説護諸童子陀羅尼經』の經文において子供を護る役割を担うのは梵天であり、せんだんけんだつば梅檀乾闥婆は諸鬼神の最上首で、呪縛せず懐柔すべき存在とされていた。しかし訶梨帝母が子を奪う厄神から子授けの善神に変じたことと同様の信仰の変化により、梅檀乾闥婆は十五鬼神から嬰兒を護る立場へと変わる。そこで修法の場に掛けられる童子経曼荼羅の主役は梵天から梅檀乾闥婆に移り、かつての配下であった十五鬼神を退治する姿で描かれるようになったとする。

小林は『覚禪鈔』及び『阿婆縛抄』に見える修法の記録から、本来は小児の無病長命を祈る修法であった童子経法が、12世紀半ばには平産を祈るために用いられていたとも指摘する。この修法が安産の目的で盛んとなった時期は、「鳥獸戯画」甲巻の制作された年代と重なっている。

そこで、12世紀～13世紀初めに成立したとされる白描図像の童子経曼荼羅¹⁴⁾における、鬼神として描かれた猫の顔を「鳥獸戯画」甲巻の猫と比較してみたい。猫鬼の曼多難提等十五鬼神を含む童子経曼荼羅の形状は、以下のA～Cの三種類に大別される。

- A) 梅檀乾闥婆と不動明王とが中央に上下に描かれ、その周囲を四角く十五鬼が取り囲むもの。
- B) 向かって右側に集まった十五鬼のそれぞれの首に巻かれた紐を左手で梅檀乾闥婆が握り、反対側には十五人の童子が梅檀乾闥婆の方を向いて合掌礼拝するもの。

C) 十五鬼が円形に栴檀乾闥婆を取り囲み、中央の栴檀乾闥婆が三叉戟に十五鬼の首を刺して持つもの。

A) の『覚禅鈔』では、勸修寺本(図7)¹⁵⁾では獅子の省略形のように描かれて鼻筋はなく、釈迦文院本(図8)¹⁶⁾では黑白のぶちでさらに略され鼻筋も口もない。

B) の仁和寺本『別尊雑記』(図9)¹⁷⁾では、黑白のぶちで眼はアーモンド形だが鼻の線は確認できない。『覚禅鈔』の勸修寺本(図10)¹⁸⁾や釈迦文院本(図11)¹⁹⁾の横顔は猫と判別することさえ難しい。醍醐寺本『天部形像』(図12)²⁰⁾の猫鬼も横顔で鼻筋がない。

C) の仁和寺本『別尊雑記』(図13)²¹⁾の猫鬼(図14)と猫鬼の首(図15)の鼻にも線がない²²⁾。ただし、『図像抄』を14世紀初めに写した圓通寺本²³⁾の猫鬼(図16)には左右の鼻筋があり、三叉戟に刺された猫鬼の首(図17)にも鼻筋が描かれる。『図像抄』は醍醐寺本奥書によれば保延5年(1139)撰とされ²⁴⁾、圓通寺本はその14世紀初めの写本という。



図7 『覚禅鈔』
(勸修寺本)
童子経曼荼羅(部分)



図8 『覚禅鈔』
(釈迦文院本)
童子経曼荼羅(部分)



図9 『別尊雑記』
(仁和寺本)
童子経曼荼羅(部分)



図10 『覚禅鈔』
(勸修寺本)
童子経曼荼羅(部分)



図11 『覚禅鈔』
(釈迦文院本)
童子経曼荼羅(部分)



図12 『天部形像』
(醍醐寺本)
童子経曼荼羅(部分)



図13 『別尊雑記』(仁和寺本) 童子経曼荼羅



図14 『別尊雜記』(仁和寺本)
童子經曼荼羅(部分)



図15 『別尊雜記』(仁和寺本)
童子經曼荼羅(部分) 猫鬼の首



図16 『図像抄』(圓通寺本)
童子經曼荼羅(部分)



図17 『図像抄』(圓通寺本)
童子經曼荼羅(部分)
猫鬼中央・上から2番目の首

白描図像における猫鬼の描写は、毛色に限ってもぶちの有無があるように、筆者によっても差異が著しく、形式の厳密な密教絵画の中では比較的裁量の余地が大きい箇所であったと思われる。その中で『図像抄』の童子經曼荼羅の猫鬼に、「鳥獸戯画」甲巻の猫の顔と共通する鼻の両脇に線を描く表現を見出すことができた。この描き方は『図像抄』の保延5年当初からのものなのか、あるいは後世の転写時の絵師の描き癖によるものなのだろうか。

5) 童子經法と猫鬼

童子經の十五鬼を描いた作例としてはもう1件、高山寺旧蔵で大和文華館所蔵『護諸童子經』の巻末に貼り付けられた形で付属する「十五鬼神図像」(登録番号183-2)が挙げられる²⁵⁾。卷子本で、十五鬼神それぞれの絵の下に「曼多難提者其形如猫」のように名称と形容、各鬼による症状を呈する小兒の姿と文章、最後に梅檀乾闥婆の姿と説明が書かれている。この図像を検討した川村知行によれば、「十五鬼神図像」の絵は巻末の署名からの高山寺僧定真の筆になる13世紀前半の作とされるが、その原本は定真の師で「傍注を施すほど図像に精通した図像家」である勸修寺の興然と想定され、12世紀前半まで遡る可能性が指摘されている。

この猫鬼(図18)の眼はアーモンド形で鼻の両側に続く線が鼻筋を形作り、口元もω状の線で表される。ただし、体の向きも手足や尾の形状も、『図像抄』の猫鬼の平たく這いつくばった姿とは異なり、獅子のように丸々と

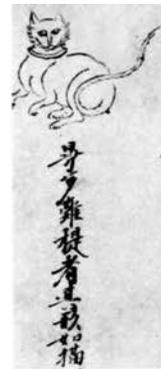


図18 「十五鬼神図像」
曼多難提(部分)
大和文華館所蔵

胸を張っている。体部の描写とは無関係に両者の猫の目鼻の表現のみが共通していることから、いずれも12世紀前半の原本の図像において、このような猫鬼の顔の描き方が一種の型として存在していたことをうかがわせる。

先の小林論文(註13参照)によれば、12世紀中頃、童子経法の用途が幼児の息災から平産の祈禱に移行した時期には「殊に皇后の御産御祈には必ず」用いられる修法として、訶梨帝法と併用して行われていたという。中山忠親『山槐記』によれば、治承2年6月28日の高倉天皇中宮平徳子の初度の懐妊着帯に際しての訶梨帝供及び十五童子供では、それぞれの本尊像を「今日之中奉図絵之」と、仏師法眼頼源が小仏師等を率いて一日で図絵したことが指摘されている。安産の祈禱は、后以外の場合も頻繁に行われたと想像される。修法の都度、この例のように短期間で図絵しなければならないとすれば、十五鬼神に略画的な描き方の型が生じていたとしても不思議ではない²⁶⁾。

6) 「辟邪絵」の猫鬼の首

この童子経曼荼羅に由来する平安末期の猫鬼の顔として唯一現存するのが、六道絵巻のうち旧益田家乙本第二段の「梅檀乾闥婆」の活躍場面(図19)である。首を取られた十五鬼の死骸が散乱する中で、十五鬼の首を三叉戟に刺して立つ梅檀乾闥婆を描く。他の六道絵巻と同様に12世紀後半の作とされる²⁷⁾ものの、この絵巻について小林太市郎は、六道の恐ろしさを描く「地獄草紙」や「餓鬼草紙」と異なり、天刑星・梅檀乾闥婆・神虫・牛頭天王・毘沙門天が疫鬼や邪鬼を駆逐する場面を描くものゆえ「辟邪絵巻」と呼ぶべきことを提案する²⁸⁾。そして梅檀乾闥婆の箇所については「曼荼羅の形式的な表現に毫も陥らずに、十五の首の表情に苦悩の鎮静を現わし、(中略)誠に超凡の画技と謂わねばならぬ。」とその技量を讃える。



図19 「辟邪絵」梅檀乾闥婆 奈良国立博物館所蔵

絵巻ゆえに画面が小さいが、梅檀乾闥婆が持つ三叉戟の先の猫鬼の首(図20)は、アーモンド形の眼に細い瞳孔、上脛から鼻の両側へと延びる線で鼻筋を形成し、この描き方は「鳥獸戯画」甲巻の猫の顔(図21)と共通している。口元の線は手前の猿鬼の首に隠れて見えないが、顔の横の線を毛描きにする点も甲巻の猫と同じである。「鳥獸戯画」甲巻の猫が、顔は手馴れて描かれることに反して体部の描写が不確かなのは、このような梅檀乾闥婆の戟に刺さった猫鬼の首の描き方に拠っ



図20 「辟邪絵」栴檀乾闥婆(部分)猫鬼の首
奈良国立博物館所蔵(左へ90°回転したもの)



図21 「鳥獣戯画」甲巻の猫(部分)
高山寺所蔵

たためではないだろうか。

猫鬼の首の毛並は薄墨色で、「鳥獣戯画」甲巻の猫の虎縞とは相違する。状況を除外しても顔立ちが全く異なるので、もちろん同一筆者によるものとは考えられず、制作時期の前後も断定できず、直接的な影響関係は想定できない。しかし12世紀中頃に盛んに行われた童子経法に用いられる童子経曼荼羅の猫鬼として、簡略に猫の顔の特徴を捉えたこのような描き方が、修法の本尊としての目的以外に、戯画的な絵巻物へと転用された可能性は充分考えられよう。

「鳥獣戯画」甲巻の猫の顔の手馴れた表現の起源を追って、平安時代後期の多様な猫の絵の描写を検証し、当時盛んであった童子経法の童子経曼荼羅に猫鬼として描かれるものの描き方との共通性を指摘した。すでに「鳥獣戯画」乙巻の動物描写と白描図像との近似性については佐和隆研や中野玄三が、丙巻の蛇と「十五鬼神図像」の蛇神については川村知行が指摘しているが、いまだ甲巻の動物と仏教絵画との関連性が論じられることはなかった。極めて些細な箇所ではあるものの、猫の顔の描写の共通性が、甲巻の作者について考察する上での端緒となることを望むものである。

注

- 1) かつては甲巻にもう一箇所、この猫の出る場面があったと思われる。「鳥獣戯画」の現存しない部分も模写したとされる住吉家模本には、木の枝に引っ掛かった蹴鞠を見上げて騒ぐ群衆中に、烏帽子をかぶり扇を持つ虎縞の猫が描かれている。ただしこの猫は横顔で鼻の脇に線は見られない。
- 2) 「周囲に描かれた他の動物と一味違う点があるのです。それは「目」。兎や鼠の目は大きな黒丸で、蛙や猿の目は小さな点で、狐の細長い目は線で表現されています。それを見た後で、烏帽子猫をよく見ると、目がパッチリと他の動物と比べて大きく描かれているのがわかります。」(「鳥獣人物戯画卷」に描かれた烏帽子猫が、やたらとかわいい) 猫ジャーナル「猫の日本史」2015年5月4日付より <https://nekojournal.net/?p=5381> 2020年8月20日取得)
- 3) 上野憲示「『鳥獣人物戯画』の復元と観照」『日本絵巻大成』6「鳥獣人物戯画」pp.122—174 中央公論社 1977年
- 4) 中野玄三「密教図像と鳥獣戯画」『学叢』2号 pp.33-58 1980年
- 5) 上野憲示・宮次男「図版解説pl29」『日本絵巻物全集』3巻「鳥獣戯画」p.69 角川書店 1959年
- 6) 「信貴山縁起絵巻には、猫が描かれています(尼公の巻)。実は、この猫、日本最古の「絵に描かれた猫」なんです。」(奈良国立博物館Twitter【信貴山展】2016年4月11日付 https://twitter.com/narahaku_PR/status/719370693146779648 2020年8月20日取得)
- 7) 久曾神昇「西本願寺本三十六人集の成立」『愛知大学文学論叢』13・14輯合併号 pp.293-324 1957年
- 8) 白畑よし「本願寺本三十六人集の装飾の成立ちに就いて一特に下絵を中心として」『美術研究』193号 pp.73-89 1957年
- 9) 江上綏「西本願寺本三十六人集」『日本の美術』478号「葦手絵とその周辺」pp.25-31 2006年

- 10) 猪熊兼樹「春日大社蔵「沃懸地螺鈿毛抜形太刀」の意匠に関する考察」『仏教芸術』266号 pp.13-28
2003年
- 11) 中野玄三「涅槃図の動物画」『日本の美術』268「涅槃図」pp.70-77 1988年
- 12) 菩提流支譯、『大正新修大藏經』19巻 pp.741-742 所載
- 13) 小林太市郎「童子経法及び童子経曼荼羅」『密教研究』84号 pp.1-56 1943年
- 14) 『大正新修大藏經 図像編』に掲載された図版に限定して検索した。
- 15) 『大正新修大藏經 図像編巻4『覚禪鈔』巻32 図像116 p.756
- 16) 『大正新修大藏經 図像編巻4『覚禪鈔』巻32 参考図像 No.30
- 17) 『大正新修大藏經 図像編巻3『別尊雜記』巻12 図像37 p.161
- 18) 『大正新修大藏經 図像編巻4『覚禪鈔』巻32 図像115 p.735
- 19) 『大正新修大藏經 図像編巻4『覚禪鈔』巻32 参考図像 No.29
- 20) 『大正新修大藏經 図像編巻7『天部形像』図像33 p.624
- 21) 『大正新修大藏經 図像編巻3『別尊雜記』巻12 図像36 p.160
- 22) ちなみに14世紀中頃の『阿娑縛抄』の同図様（『大正新修大藏經 図像編巻7『阿娑縛抄』巻148 図像79）では、尾が短く耳が長く髭もなく、猫と認識されているとは思えない。
- 23) 『大正新修大藏經 図像編巻3『図像抄』巻10 図像126
- 24) 佐和隆研「醍醐寺聖教庫藏圖像抄録」『密教研究』75号 pp.93-99 1940年
- 25) 川村知行「高山寺旧蔵護諸童子経と十五鬼神圖像」『大和文華』95号 pp.1-19 1996年
- 26) 小林は十五鬼神の原型は大陸にあると見て、『仏説金輪仏頂大威徳熾盛光如来陀羅尼経』（『大正新修大藏經 図像編巻4『梵文熾盛光佛頂陀羅尼諸尊圖會（京都東寺寶菩提院藏本）』に該当か）と名称がほぼ一致する鬼とするものに猫鬼も含まれるが、この獸頭人身の猫鬼の顔の表現は異なっている。また小林の論文「辟邪絵について」には大英博物館所蔵の千仏洞出土の唐時代の獸頭人身の護符（Museum number 1919,0101,0.177.1-3）が紹介されるが、この護符の猫の表現は人の顔に近く、目鼻は「鳥獸戯画」の猫とは異なる。ただし、これ以外にも大陸に別の猫鬼の表現があった可能性は充分考え得る。『図像抄』や「十五鬼神圖像」の猫鬼の顔の描写が大陸に由来するものか、日本で発生したものかを、現時点で判断することはできない。
- 27) 宮次男「旧益田家乙本」『日本の美術』271号「六道絵」pp.29-31、1988年
- 28) 小林太市郎「大和絵史論第4章 辟邪絵巻に就きて」『小林太市郎著作集 5（日本芸術論篇 1）』pp.197-274 淡交社 1974年（初出『国華』641-643、645、646、648号、1944年）

図版出典（いずれも部分）

- 1 『日本絵巻大成6 鳥獸人物戯画』中央公論社 1977年
- 2 『日本絵巻大成6 鳥獸人物戯画』中央公論社 1977年
- 3 『日本絵巻大成6 鳥獸人物戯画』中央公論社 1977年
- 4 『日本絵巻大成 4 信貴山縁起』中央公論社 1977年
- 5 『日本の美術』478号 至文堂 2006年
- 6 「春日大社蔵「沃懸地螺鈿毛抜形太刀」の意匠に関する考察」口絵『仏教芸術』266号 2003年7『大正新修大藏經 図像編巻4『覚禪鈔』巻32 図像116
- 8 『大正新修大藏經 図像編巻4『覚禪鈔』巻32 参考図像 No.30
- 9 『大正新修大藏經 図像編巻3『別尊雜記』巻12 図像37
- 10 『大正新修大藏經 図像編巻4『覚禪鈔』巻32 図像115
- 11 『大正新修大藏經 図像編巻4『覚禪鈔』巻32 参考図像 No.29
- 12 『大正新修大藏經 図像編巻7『天部形像』図像33
- 13 『大正新修大藏經 図像編巻3『別尊雜記』巻12 図像36
- 14 『大正新修大藏經 図像編巻3『別尊雜記』巻12 図像36
- 15 『大正新修大藏經 図像編巻3『別尊雜記』巻12 図像36
- 16 『大正新修大藏經 図像編巻3『図像抄』巻10 図像126

- 17 『大正新修大藏経』図像編卷3『図像抄』卷10図像126
- 18 「高山寺旧藏護諸童子経と十五鬼神図像」口絵『大和文華』95号1996年
- 19 『日本の美術』271号 1988年
- 20 『日本の美術』271号 1988年
- 21 『日本絵巻大成6 鳥獣人物戯画』中央公論社 1977年